

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

クトゥブ『ホスロウとシーリーン』導入部から  
－ペルシア語原作との対照－

The introduction of Quṭb's *Khusraw u Shirin*:  
a comparison with the original Persian text by Nizami

菅原睦

SUGAHARA, Mutsumi

## クトゥブ『ホスロウとシーリーン』導入部から —ペルシア語原作との対照—

菅原 睦

MUTSUMI@tufs.ac.jp

キーワード：中期チュルク語 クトゥブ 『ホスロウとシーリーン』  
ペルシア語 翻訳作品

### 0 はじめに

クトゥブ *Qutb* による『ホスロウとシーリーン』*Xusraw u Šīrīn* は、14世紀の中期チュルク語を代表する長編物語詩である<sup>1</sup>。1341/2年に完成され金帳汗国(ジョチ・ウルス)のティニバグ・ハーン *Tinibäg<sup>2</sup> Xān* 夫妻に献呈されたこの作品は、ニザーミー *Ilyās b. Yūsuf Nizāmī* (1141?~1209?年)のペルシア語による同名のマスナヴィー<sup>3</sup>を原作とする(広義の)「翻訳」であり、チュルク語—ペルシア語関係の歴史という観点からもきわめて注目されるものである<sup>4</sup>。

これまでにポーランドの *Zajāczkowski* やトルコの *Hacıeminoğlu* によってテキスト・エディションが刊行されているが、両テキストともその後の研究の進展をふまえた改訂を必要としている。また本文の確定・解釈に不可欠なペルシア語原作との詳細な対照も知る限り発表されていない<sup>5</sup>。本稿は、この作品の導入部前半の新しい転写テキストおよび日本語訳を、ペルシア語原作の対応箇所とともに提出することを目的とするものである。

### 1 テキスト・エディションおよび語彙集

クトゥブ『ホスロウとシーリーン』についての詳しい解題・研究史は別稿に

<sup>1</sup> 本稿で参照した文献中、ポーランド語で書かれたものの利用にあたっては阿部優子氏の御尽力をいただいたことに感謝したい。もちろん間違いはすべて筆者の責任である。

<sup>2</sup> または *Tinibäg*。

<sup>3</sup> ニザーミー作品の概要についてはニザーミー、岡田恵美子訳(1977)所収の解説を参照。

<sup>4</sup> チュルク語—ペルシア語関係の歴史と翻訳については菅原(2009)を参照。

<sup>5</sup> 部分的な対照は *Zajāczkowski* の一連の研究に見られる。なお原作との対照は、原作の本文校訂にも貢献することが指摘されている。Flemming (1974:209-226)を参照。

ゆずることとし<sup>6</sup>、ここでは本稿で参照したテキスト・エディションと語彙集について簡単に触れておく。

[テキスト・エディション]

Zajączkowski 1958a [Z] (語彙集は [Słownik])

この作品について一連の重要な研究を発表しているポーランドの Ananiasz Zajączkowski により、ラテン文字転写テキスト、現存写本(1383年筆写)<sup>7</sup>のファクシミリ、語彙集の全3巻からなる。この作品についての基本文献としてよく利用されているものである。作品の全訳は付されていないが、語彙集の各項目には用例とそのポーランド語訳が添えられている。ただし語彙集はすべての語彙を収めていない<sup>8</sup>。

Hacıeminoğlu 1968 (repr. 2000) [H]

当初イスタンブール大学文学部の出版物として刊行され、後にトルコ言語協会から再版された<sup>9</sup>本書は、言語についての記述と転写テキストからなっている。前者は正書法、音韻、形態論をカバーしており重要である。テキスト本文には行番号の誤りや行の欠落が見られる<sup>10</sup>。翻訳や語彙は収められていない。

これらのほかに、ウズベキスタンで刊行された次の2種類の版が存在するのを知っているが、ともに今回は利用できなかった。

Fozilov, E. (1973) *XIV Asr Xorazm Yodnomalari*. Toshkent: Fan Nashriyoti<sup>11</sup>.

Qutb Xorazmiy, *Xusrav va Shirin (Nizomiydan tarjima)*. nashrga tayyorlovchi: Hodi Zarif. Toshkent: Gʻafur Gʻulom Nomidagi Adabiyot va Sanʼat Nashriyoti 1986.

[語彙集]

Fazylov 1966/1971 [F I/II]

<sup>6</sup> 主な紹介としては Zajączkowski (1954), Eckmann (1964:280-285), Nadzhip (1989:127-136), Ata (2002:38-40)などをあげることができる。さらにこれらにおいて言及されていない重要な研究として Flemming (1974)および DeWeese (2005)がある。前者はファフリー-Faxrī (Faxreddīn Yaʻqūb b. Muḥammed)の古アナトリア・トルコ語による『ホスロウとシーリーン』(1367年)に関する浩瀚な研究書であるが、比較の対象としてクトゥブ作品への言及が随所に見られる。後者では、タラーズィー Šayx Aḥmad b. Xudāyād ʿArāzī が 1436/7年に執筆を始めた『雄弁の諸技法』*Funūn al-Balāḡa* 中にクトゥブ『ホスロウとシーリーン』からの引用が見られることが指摘されており(pp. 130-131, 158), この作品の受容を考える上で重要な情報を提供している。さらにそこでは作者名がより完全なクトゥブッディーン・サライー Qutb al-dīn Sarāyī となっていることも注目される

<sup>7</sup> パリ国立図書館 Manuscripts turcs, Ancien fonds No. 312.

<sup>8</sup> cf. Bürgel (1967:290).

<sup>9</sup> 内容は旧版と同一と思われるが、導入部分のページ番号が旧版の VII-XIV から V-XII に変更されている。

<sup>10</sup> cf. Flemming (1974:20).

<sup>11</sup> クトゥブ作品は pp. 129-325 で取り上げられている。

クトゥブ作品を含む 14 世紀チュルク語の代表的な文献 4 点の語彙を、借用語も含め収録している。見出し語はキリル文字と元のアラビア文字表記によるが、用例はキリル文字転写のみで示され、ロシア語訳が付されている。

#### Nadzhip 1979 [N]

こちらはクトゥブ作品に含まれるアラビア語・ペルシア語起源以外の語彙が、他の文献での在証とあわせて収められている。見出し語と用例は元のアラビア文字表記とキリル文字転写を併記しており、ロシア語訳が添えられている。タイトルには「全 4 巻」とあるが、母音で始まる語を収めた第 1 巻以外の巻の刊行は確認できておらず、未刊行と思われる<sup>12</sup>。

## 2 転写テキストおよび訳注

以下では、Zajaczkowski 1958 (第 2 巻) 所収のファクシミリに基づき、冒頭 122 対句分<sup>13</sup>の転写テキストと訳注を対応するペルシア語原作(P)とともに示す<sup>14</sup>。

[1] 「慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において」

bi-sm Allāh al-rahmān al-rahīm 1-13 対句 = P1-13.

[2] 「至高のアッラーの唯一性を述べる」

Allāh ta‘ālā-niḡ tawḡīdīn ayur 14-49 対句 = P14-54.

[3] 「諸天の動きの事」

aflāk ḡarakāti-niḡ sözi 50-85 対句 = P56-91.

[4] 「至高の神への祈願」

t(ä)ḡri ta‘ālā-niḡ munājāti 86-122 対句 = P96-139.

アラビア語・ペルシア語起源の語については一般的な転写に従う。それ以外については、語頭以外のゼロ表記された母音を( )付で、語頭のマッダ記号付アリアフ(ا)を **a** で示す。またファー(ف)と上 3 点ファー(ف)は、それぞれ f と v に翻字して示す。

[1v/4]

bi-sm Allāh al-rahmān al-rahīm

1	Ilāhī tawfīqīḡ q(a)pḡīn ača ber	köḡ(ü)l-gä rahmatīḡ urḡīn <sup>15</sup> s(a)ča ber
	köḡ(ü)l ber kim yaqīnīḡga y(a)rasun	aḡīn ḡaflat bu köḡlüm-din yirasun
	bu köḡlüm közgüsin şayqal qīlu ber	q(a)muḡ muşkil-larīmni ḡal qīlu ber

<sup>12</sup> 以下、これら 2 種の語彙集からの引用はラテン文字表記に置き換えて示す。

<sup>13</sup> 作品全体の 40 分の 1 強に相当する。

<sup>14</sup> 引用テキストは Barāt Zanjānī 校訂本の本文によるが、クトゥブによるチュルク語テキストとの対照上必要な場合には異本の形式を[ ]内に示した。

<sup>15</sup> Z 17 urḡyn.

- |    |   |  |
|----|---|--|
|    | içimni öz nūruḡ birlä y(a)rutġil  | tilimni öz ʰanāḡ üzrā yürütgil   |
| 5  | Dāwūd y(a)ḡlġ bu köḡlüm tāza qilġil<br>bu söz kim b(a)šladīm x <sup>w</sup> aš k(ä)lsü jāḡga<br>aniḡ teg kim oqġgan dil ač(i)lsun<br>q(a)rasī közni toluġ nūr qilsun<br>ma‘ānī birlä yüksäk qil sözümnī | Zabūrīmnī <sup>16</sup> b(ä)ḡük āwāza qilġil<br>mubārak qil sözümn b(a)rča jahāḡga<br>tilim-din mušk u ‘anbarlar s(a)čilsun<br>ešitġan maġzīnī maxmūr <sup>17</sup> qilsun<br>sa‘ādat birlä bar <sup>18</sup> et bu özümni <sup>19</sup> |
| 10 | köḡ(ü)l-lārniḡ mufarriḡ-nāma-sī qil<br>šīrīn qil šāh köziḡā söz jamālī<br>‘ināyat birlä qil köḡlümni āġāh<br>‘ināyat kim s(a)ḡa oš qildī yārī <sup>21</sup>   | q(a)muġ muškil kilidī bolsu bu til<br>kim oš Šīrīn erür söz içrā fālī<br>bu söz içrā madad qil qulġa Allāh <sup>20</sup><br>ne turduḡ tilġä k(ä)ltür dilda barī  |

[1] 「慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において」

1 神よ 御身の天佑の扉を開きたまえ 心に御身の慈悲の種子を蒔きたまえ

P1a Xudāwandā dar-i tawfiq bigšāy. 後半の内容は一致しない。

2 御身の確信に相応しい心を与えよ 他の怠りを我が心から遠ざけよ

P2a dilē dih k-ō yaqīnat rā bišāyad. 後半の内容は一致しない。

3 私の心の鏡を磨きたまえ すべての私の難事を解きたまえ

4 私の内面を御身の光により照らせ 私の舌を御身の賛辞の上に動かせ

P4 darūnam rā ba nūr-i x<sup>w</sup>ad bar afrōz zabānam rā ʰanā-yī x<sup>w</sup>ad dar āmōz. ペルシア語原文の後半は「私の舌に御身への賛辞を教えよ」を意味する。

5 ダーウードのように我が心を新たにせよ 私の詩篇を高く響かせよ

P5 ba Dāwūdī dilam rā tāza gardān Zabūram rā baland-āwāza gardān.

6 私が始めたこの言葉が魂に心地よくあるよう 私の言葉を全世界にめでたいものとせよ

P6 ‘arūsē rā ki parwardam ba jānaš mubārak-rōy gardān dar jahānaš. ペルシア語原文の最初は「私が育てた花嫁を」となっている。

7 (この書を)読む心が開かれるとともに 私の舌が麝香・龍涎香を散らすように

P7 čunān k-az x<sup>w</sup>āndanaš farrux šawad rāy [var: dilhā šawad šād] zi mušk-afšāndanaš Xallux šawad jāy [var: bād]. チュルク語訳の dil ačilsun 「心が開かれるように」は異文 dilhā šawad šād 「心が喜ぶように」によると思われる。ペルシア語原文の後半は「麝香を散らすことから(その)場所はハッルフ(地名)となる」。

8 その墨色が(読者の)眼を光で満たすように 聴く者の頭脳を酔わせるように

P8 sawādaš dīda rā pur-nūr dārad samā‘aš maġz rā ma‘mūr [var: maxmūr] dārad.

<sup>16</sup> H 184 zebūrumni.

<sup>17</sup> H 181 maḡmūr.

<sup>18</sup> H 181 bār.

<sup>19</sup> Z 17 uzumny.

<sup>20</sup> 'lh と綴られ、マッダ記号とシャッダ記号を伴う。

<sup>21</sup> H 181 yari.

チュルク語訳の *maxmūr qilsun* 「酔わせるように」は異文 *maxmūr dārad* 「酔わせる」に一致する。ペルシア語原文では「それを聴くことが頭脳を」と表現されている。

9 意味によって私の言葉を高めよ 幸運によってこの私自身を存在させよ

P10 *ma‘ānī rā badō dih sar-balandī sa‘ādat rā badō kun naqš-bandī* 「意味をそれに誉として与え、幸運をその姿形とせよ」。

10 (これを)「心を喜ばせる書」とせよ この舌をあらゆる難事への鍵とせよ

P9 *mufarriḥ-nāma-i dilhāš x‘ānand kilīd-i band-i muškilhāš dānand* 「(これは)「心を喜ばせる書」と呼ばれる 難事の結びの鍵として知られる」。

11 言葉の魅力<sup>シーリーン</sup>を王の目に甘美なもの<sup>シーリーン</sup>とせよ 「シーリーン」こそは言葉のうちの吉兆であるから

*kōziḡā* に対し Z 17 *kōzingā*, H 181 *kōziḡe*. 3 人称所有接尾辞と与格接尾辞との組み合わせ *ynk* は Z のように *-ingā* と読みめるが、ここでは *-iḡā* を採用する<sup>22</sup>。一方後舌母音環境では *-iḡā* (*ynk*) と *-ingā* (*ynḡ*) とはアラビア文字綴り字によって区別される。前者の例は *barliqīḡa* 「その存在に」(16)に、後者の例は *farmānlarīḡa* 「その命令に」(47), *bašīḡa* 「その頭に」(57)などに見られる。P11 *ba čašm-i šāh šīrīn kun jamālaš ki x‘ad bar nām-i šīrīn ast fālaš*。

12 私の心に (神の) 恩顧を周知させよ この言葉においてしもべに助力せよ、アッラーよ

13 恩顧がまさにお前に援けとなったのだから なぜ立ち止まっているのか 心にあるものを言葉に表わせ

P13 *ču fayyāḍ-i ‘ināyat kard yārī biyār ay kān-i ma‘nā tā čī dārī*. ペルシア語原文の後半は「意味の宝庫よ、おまえがもっているものをもってこい」。

Allāh ta‘ālā-niḡ tawḡīdīn ayur

<i>iḡi atī birlā b(a)šla sözüḡni</i>	<i>kim ol bar qīldī yoqdīn bu özüḡni</i>
15 <i>uluḡ t(ā)ḡri kim aḡzun-nī y(a)rat[t]ī</i>	<i>tutup bek yerni köklārni törāt[t]i</i>
<i>t(a)nuq b(a)rča xalāyiq barliqīḡa</i>	<i>dalīl-lar ham üküš bar birlikiḡā</i>
<i>ta‘ālā Allāh aḡa yoq oxšašīḡ bir</i>	<i>y(a)ratur ham yūritür ḡukmī yūrir</i>

[2r/5]

<i>falak-nī t(ā)zḡitip yulduz yūritḡān</i>	<i>q(a)muḡnī ḡukmī birlā ham iḡitḡān</i>
<i>bu munča ‘ilm u ḡikmat-lar y(a)ratḡān</i>	<i>q(a)raḡqu<sup>23</sup> tūn-ni kūn birlā y(a)rutḡān</i>
20 <i>s(ā)finč u q(a)ḡḡu qorquḡ u umiḡnč yūz</i>	<i>y(a)rat[t]ī tūn mā<sup>24</sup> kūn ay u yulduz</i>
<i>wuḡūdī b(a)rča mawḡūd üzrā ḡāhir</i>	<i>nišānī b(a)rča köḡḡānlärkä zāhir</i>

<sup>22</sup> *-iḡā* は古代チュルク語の形式と一致する。 *-ingā* については Sugahara (2015:182)を参照。

<sup>23</sup> Z 18 *qaranyu*.

<sup>24</sup> MS *twnm*’

- kawākib buyruqündin işdā yürir  
y(i)tiḡ b(a)qǵanlar andin t(a)pti maqşūd  
aḡar hēç oxşamaz bu b(a)rça n(ä)ñlār
- 25 munazzah δātī anīḡ özgä n(ä)ñdin  
bu ma'nâ-nî biläy(i)n tesāḡ ey dil  
özün yüz pāra qıl gul teg bu bāḡda  
s(ä)n andin yügrü k(ä)ldin oşbu yerkä  
anī izdäyü 'aqlīm k(ä)zdi aflāk
- 30 'aql<sup>30</sup> m(ä)n bilgä m(ä)n tep izdä äy yār  
körüp ol ḡālīn özdin el kötärđi  
anī bilmäklik ärmāz<sup>31</sup> bizgä duşwār<sup>32</sup>  
kimün şam'ında körsāḡ bir y(a)ruqluq  
bilig berdi anī bilmäklik üçün
- 35 urup hay'atdīn<sup>34</sup> oşbu çarx-i aflāk  
čeçäk teg ganj tupraq-dīn y(a)rat[t]i  
b(a)ḡirdin suḡarip bu jān bāḡini<sup>36</sup>  
yoqalḡular q(a)muḡlarī yoqalḡay
- [2v/6]  
y(a)ratmaqñi anīḡ t(ä)ḡ qıldi āḡāz
- 40 erür ol b(a)rçalarqa qılḡuçi jūd  
nişān berdi bu māya-larqa ixlāş  
jihāt-kä alti köñlāk ol k(ä)δürdi  
birinjä berdi baxşīs kim bitürgäy  
ne bitürgän xabarlıḡ berdükindin
- 45 ne otta bar xabar küydürgänindin  
erür ol bir<sup>40</sup> y(a)ratḡan ortaḡi yoq
- ṭabāyi'-qa şaraf ham şun'ī berür  
eş ol<sup>25</sup> xalwat-da olturḡanḡa ma'būd  
saqınmaḡ kim kişi fikr etip aḡlar  
mubarrā ḡukmī anīḡ b(a)rça t(ä)ñdin  
q(a)muḡ s(ä)n s(ä)n s(ä)n<sup>26</sup> anīḡ m(ä)n teyü bil  
kim oş yoq tandurust-luq oşbu taḡda  
y(a)na keç mundin ö<sup>27</sup> tut anda yergä (?)  
bu wahm oprat[t]i<sup>28</sup> oş na'layn-i<sup>29</sup> idrāk  
munī bildi bil(i)nmāz kim bu asrār  
aradīn anda soḡ özin ketärđi  
walēkin oşbu iş ḡayrat-kä t(a)rtar  
anīḡ birlikiñä berür t(a)nuqluq  
başārat berdi äymänmäklik<sup>33</sup> üçün  
muhandis teg raqam taxta-i xāk<sup>35</sup>  
biziḡ teg şaxş ham s(u)v-din törät[t]i  
çirāḡ ornīḡa berdi köz yaḡini  
ham ol bār<sup>37</sup> anīḡ teg bar qalḡay
- kim oş hēç bilsä bolmaz fikr etip rāz  
öñin kim māya-larni qıldi mawjūd  
bular tegmä 'amal-da bolsu tep xāş  
y(a)na yer<sup>38</sup> üzrā tört gawhar ödürdi  
birin qīsqañç qıldi kim yitürgäy<sup>39</sup>  
ne yiḡ[ḡ]an jahd etip māl terdükindin  
ne s(u)v aḡlar özi söndürgänindin  
q(a)muḡ ḡammāl-i<sup>41</sup> farmān biz şaki yoq

<sup>25</sup> Z 18 iş ol, H 182 işol.

<sup>26</sup> Z sän sän-sän, H 182 sen-sen sen.

<sup>27</sup> Z 18 ot, H 182 öt.

<sup>28</sup> Z 18 ubraty.

<sup>29</sup> Z 18 na'lin, H 182 na'lin.

<sup>30</sup> Z 19 'aql, H 182 'āql.

<sup>31</sup> Z 19 umaz.

<sup>32</sup> MS *dwšw'r*.

<sup>33</sup> Z 19 imänmäklik.

<sup>34</sup> Z 19 ḡajätdyn.

<sup>35</sup> Z 19 raqm taḡta ḡāk, H 183 raqım-i taḡta-i ḡāk.

<sup>36</sup> Z 19 bayyny.

<sup>37</sup> Z 19 bary, H 183 barı.

<sup>38</sup> Z 19, H 183 bir.

<sup>39</sup> Z 19 jetürgäj.

<sup>40</sup> H 183 ol kim.

<sup>41</sup> Z 19 ḡammāl.

kimūñ bar zahra-sī ḥammāl-larīngā	ay(i)tsa uyma tep farmān-larīngā
bu yer tuğrur özi dāya tilāmāz	k(ä)türür yel walē yīdğin yīylamaz
zihē šāni‘ kim ol bir munča šan‘at	y(a)ratmīš kör zihē quwwat-lī qudrat

[2] 「至高のアッラーの唯一性を述べる」

14 主の御名により語りを始めよ 主はお前を無から有にした

15 世界を創造した偉大な神は 大地をしっかりと保ち、諸天を創造した

後半の内容は P14b *falak junbiš zamīn ārām az ō yāft* 「天は動きを、地は安定をかれから得る」によると思われる。

16 すべての創造物は御身の存在の証し 御身が唯一である証拠もあまたある

*barlīqīña* を Z 18 は *barlyqynga* と写す。11 の注を参照。P15 *Xudāyē k-āfarīnīs dar sujūdaš guwāhē muṭlaq āmad bar wujūdaš* 「(すべての) 創造物が平伏して、その存在の絶対的な証拠となる神」。

17 至高のアッラー かれに同類はひとつとしてない 創造し (命令を) 行わせ その命令は行われる

P16a *ta‘ālā Allāh yakē bē-miθl u mānand*. 後半の内容は一致しない。

18 天を巡らせ星を歩ませる御方 すべてをその命令により育まれる御方

P17a *falak bar pāy dār u anjum-afroz* 「天を支え星を輝かせる御方」。後半の内容は一致しない。

19 これほどの知識と知恵とを創造する御方 闇夜を昼により照らす御方

「闇」を意味する語は *qr‘nkqw* と書かれており、Z 18 の転写 *qaranyu* は正しくない<sup>42</sup>。P18 *jawāhir-baxš-i fikrathā-yi [var: ḥikmathā-yi] bārīk ba rōz āranda-i šabhā-yi tārik*. 前半は「繊細な思考 [異文：知恵] に実質を与える御方」。

20 喜び 悲しみ 恐れ 望みの現れ (?) 昼と夜 月と星とを創造された

*umīnč* の初頭母音はザンマ記号付のアリフで表記されている。*yüz* 「顔」は意味が取れない。原文の *nigār (nigāstan* 「描く」の語根)を「絵姿」のように解して訳したものか。P19 *ğam u šādī-nigār u bīm u ummēd šab u rōz-āfarīn [var: āfarīd] u mäh u x<sup>w</sup>aršēd*. 前半は「悲しみ、喜び、恐れ、望みを描く御方」。

21 その存在はすべての存在物を越えて清浄 その徴は見る者すべてに明らか

Z 18 および H 182 が前半の最後の語を *tāhir* 「清浄な」とするのに対し、F I 390 は後半の最後の語と同じく *zāhir* 「明らか」としている。一方ペルシア語原文では *qāhir* 「勝利する」が対応する。P21 *wujūdaš bar hama mawjūd qāhir nišānaš bar hama bīnanda zāhir*.

22 星々はその命令により事にあたる 諸元素にはその御業が榮譽を与える

*yürir (yorir)* と *berür* とは正しく押韻しない。P22 *kawākib rā ba qudrat kār-farmāy ṭabāyi‘ rā ba ḥikmat [var: šan‘at] gawhar-ārāy* 「星々に全能により事を命じられる御

<sup>42</sup> この語の綴り字については Sugahara (2015:184-185)を参照。



方, 諸元素に叡智により宝石を飾られる御方]. チュルク語文の *şun* ‘「御業」は原文での *ḥikmat* 「叡智」に対する異文 *şan* ‘at 「造化」によったか.

23 しかと見る者たちはそこに目あてを見出した 独居に座る者にとっての友  
崇拜される者 (神)

*maqşūd* 「目あて」はペルシア語原文の *sawād* 「黒色」に対する異文 *murād* 「願望, 意図」に意味的に対応する. *eş* 「仲間, 友」は原文の *anīs* 「親しい友」を訳したものである. P23 *sawād-i* [*var: murād-i*] *dīda-i bārīk-bīnān anīs-i xātir-i xalwat-nišīnān* 「明敏な者たちの瞳 [異文: 目の願望], 独居に座る者たちの心の親しい友」.

24 あらゆるものはかれに少しも似ていない 人が考えてわかると思うな

25 かれの本質は他のものから自立しており かれの命令は一切の同等を免れている

P28 *mubarrā ḥukmaş az zōdī u dīrī munazzah ḍataş az bālā u zērī* 「かれの命令は早い遅いから免れており, かれの本質は高い低いから自立している」.

26 この真意を知ろうというなら おお心よ すべてはお前であり 「私のかれの  
ものである」と知れ

感嘆詞 *ey* の初頭母音はカスラ記号付のアリフで表記されている. 同様の表記は 66, 85 にも見られる. 後半は Z 18 のように *qamuṣ sän sän-sän* ではなく, *qamuḡ sän sän. sän* “*anīḡ mǎn*” *teyü bil* と解釈すべきであろう. P29 *ḥurūf-i kāyināt ar bāz jōyī hama dar tu-st u tu dar lawḥ-i öyī* 「宇宙の神秘をもし見い出そうとするならば, すべてはお前の中にあり, お前はかれの書板の中にいる」.

27 この園で自身をバラのように百の断片にせよ この山で健やかさはないのだから

*ošbu tağda* 「この山で」に対応する原文のペルシア語は *az īn dāğ* 「この焦痕<sup>43</sup>ゆえに」. P30 *ču gul şad pāra kun x<sup>w</sup>ad rā dar īn bāğ ki natwān tan-durust āmad az īn dāğ*.

28 お前はそこからこの場所へと走って来た 再びここを過ぎて去りそこの列に着け (?)

*öt* に対して Z 18 は *ot*, H 182 は *öt* と写しているが, それぞれどのように解釈したかは不明. 最後の語は Z に従い *yergä* 「列」と読んでおく<sup>44</sup>. 同じ形は 53r6 にも見られるが, そこでは「順に」と解される: *ičä başladılar yergä aḍaqī* 「彼らは順に杯を飲み始めた」. モンゴル系言語に由来すると考えられるこの語は (cf. Doerfer 1963:291 *ğergä*), 他の中期チュルク語文献では *järgä, jergä* という形で見られる: *alarnī säwgän kişilärniñ järgäsindin qalmış bolmağay mǎn* 「彼らを愛する人たちの列から取り残されない」 [TA 71r16-17]; チャガタイ語 *jergä* 「列, 隊列」(菅

<sup>43</sup> 神への愛に由来する心の焦痕を意味すると考えられる. cf. ed. Zanjānī, p. 288.

<sup>44</sup> *jergä* ‘szereg; kolejno’ (?) (Słownik:78). なお Z の転写法では文字 *j* は半母音 *y* を表わす. 一方 H 182 は *yirge* とするが, 脚注 (fn. 4) において *n’irge* とも読めることを指摘している.

原 2003:34-35). P31 tu z-ānjā āmadī k-īnjā parīdī [*var.* dawīdī] az īnjā dar guḍār k-ānjā rasīdī. yūgrū kāldīj 「走って来た」は異文 dawīdī とよく対応する。原文の後半は「ここから過ぎよ、そこに到達するだろう」。

29 かれを尋ねて私の知性は諸天を巡り歩いた この想念は認識の履物をすり減らした

Z 18 は ubraty<sup>45</sup> oš na‘līn idrāk, H 182 は obrat[t]i uš na‘līn idrāk, さらに N 265 は oprattī oš na‘līn idrak とするが、最後の 2 語は na‘layn-i idrāk と読むべきである。

P25 ba just-u-jō-yi ō bar bām-i aflāk darīda [*var.* šikasta] wahm rā na‘layn-i idrāk. ‘aqlīm 「私の知性」, kāzdi 「巡り歩いた」にあたる語はいずれもペルシア語原文に見られない。

30 私は知性である 私は賢者であるといつて（それを）探すがよい 友よ これを知った（としても）この秘密は知りえない

短長の韻律に合わせるためにアラビア語‘aql の語末の子音連続に母音が入挿された‘aqīl のような形が用いられたと考えれば Z 19 の転写‘aqyl は正しい<sup>46</sup>。一方 bilgā 「賢者」と意味的に釣り合うのはむしろ H 182 の‘āqīl 「知者」である。

P26 xirad dar justanaš hušyār bar xāst ču dānistaš namēdānad čap az rāst 「知性はそれを探すべく注意深く立ち上がった（しかし）それを知ったところで右も左もわからなかった」。

31 そのありさまを見て自ら手を挙げた その後そこから自分で離れた

el kötār- 「手を挙げる」は‘to give up, abandon’ (cf. Pers. dast bar dāštan) の意味であるという (Bodrogligeti 2001:299)<sup>47</sup>。

32 かれを知ることは我々には難しくない しかしこの事は（我々を）驚異へと導く

P32 šināsāyīš bar kas nēst dušwār walēkin ham ba ḥayrat mēkašad kār. ペルシア語原文では「誰にとっても難しくない」。

33 誰のろうそくに明るさを見ようとも（それは）かれの唯一性の証しを与える

P37 zi har šam‘ē ki jōyī rōšanāyī ba waḥdānīyataš yābī guwāyī. 後半は「かれの唯一性への証しをお前は見出す」という意味である。

34 かれを知るために知恵が与えられた（かれを）畏れるために見識が与えられた

P39 xirad baḥšīd tā ō rā šināsēm bašārat dād tā z-ō ham harāsēm. ペルシア語原文では「知るために」、「畏れるために」に 1 人称複数の形式が用いられている。

35 この天輪の様相に従って 技師のように土の板に数字を記し

<sup>45</sup> 副動詞と解しているようである：‘niszczać się, zużywać’ (?) (Słownik 194).

<sup>46</sup> 中期チュルク語文献に見られる母音挿入については菅原(2007:30)を参照。

<sup>47</sup> el kötārdi ‘zrezygnował’ (Słownik 104) も同様。一方 N 438 は‘on poterjal soznanie’ 「彼は意識を失った」と訳している。

raqam taxa-i xāk に対して Z は raqm<sup>48</sup> tahta hāk, H 183 は raqim-i tahta-i hāk とする. raqam ur- はペルシア語 raqam zadan のカルクと考えられる. 「この天輪の様相」の解釈はペルシア語原文の「9つの天の文字の様相<sup>49</sup>」を参考にした. P40 fikand az hay'at-i nuh harf-i aflāk ruqūm-i handasī bar taxa-i xāk.

36 花のような宝を土から創造した 我々のような人物をも水から生み出した

37 この命の園を肝臓で潤わせ 明かりの代わりに目の油を与えた

bāginī を Z 19 は bayyny とする<sup>50</sup>. köz yaği 「目の油」に対して Zajonchkovskij (1962:61-62)は「瞳；大切なもの、心地好いもの」‘zenitsa oka; chto-to dorogoje, priyatnoje’ といった意味を示唆している. P41 nabāt-i rūh rā āb az jigar dād čirāg-i dīda rā pīh az bašar dād 「魂の植物に肝臓から水を与えた、眼の明かりに視覚から油を与えた」.

38 滅びるべきものはそのすべてが滅びる (しかし) かれは創造主でありその(名の)ように存在し続ける

後半の内容は bārī (< Ar. bāri' ) 「造物主」と bar 「存在する」との掛詞に基づくと考えられる.

39 (かれは) 創造を 誰も (その) 秘密を考えて知ることができないように開始した

P43 čunān kard āfarīniš rā ba āgāz ki pay burdan nadānad kas badān rāz.

40 かれはあらゆるものに対して寛大さを行なう者 先に諸々の元種を存在させた

öjin は「他の」を意味する語として知られている(EDPT 170 (öji:), F II 195, N 376)が, H 45, 80 と Bodrogligeti (2001:321)はこれを時間の副詞として ‘önce’; ‘before’ 「前に」という訳を与えている. ここでは『クルアーン注釈書』68a19-68b1 (cf. Borovkov 1963:247; Usta 2011:160)に見られる öjin-ki ümmetlerdin 「以前の諸共同体から」<sup>51</sup>を参考に解釈した. ペルシア語原文では nuxustīn 「最初の, 最初に」が対応する. P47 ču baxšāyanda u baxšanda-i jūd nuxustīn māyahā rā kard mawjūd 「施す者, 寛大さを授ける者として, 最初に元種を存在させた」.

41 これらの元種に対して誠心を徴とした これらがすべての行ないに備わっているようにと.

P48 ba har māya nišānē dād az ixlāš ki ō rā dar ‘amal kārē buwad xāš.

42 かれは方位に6つのシャツを着せた さらに地上に4つの宝石を選び出した 「6つのシャツ」と「4つの宝石」はそれぞれ6つの方位と4つの元素を指し

<sup>48</sup> この読みは文字カーフ(◌)にスクーン記号(母音ゼロ)が付されていることによると思われる.

<sup>49</sup> 9つの天の星々の配置を意味する.

<sup>50</sup> Słownik 161 (suyar-の項)では bayyny (bāgyny) ‘wezeł (ogród)’ としており, 「結び」と「園」の両方の解釈が示されている. 一方 Zajonchkovskij (1962:57)では同じ語が ‘sad’ 「園」と訳されている. なお同論文(pp. 57-58)ではこの対句とペルシア語原文との関係が論じられている.

<sup>51</sup> アラビア語 min al-awwalīn 「昔の者から」(Qur’an 56.13)に対する訳である.

ているが、前者はペルシア語原文では「6つの襟」となっている。P42 *jihat rā šaš girībān dar sar afkand zamīn rā čār gawhar dar bar afkand*<sup>52</sup>.

43 ひとりには成し遂げるようにと施しを与えた (また) ひとりを失うようにとけちにした

ここで *yitür-*「失う」と読んだ行末の動詞は(Z 19のように) *yetür-*「至らせる」とも読めるが<sup>53</sup>, どちらもペルシア語原文中の対応する動詞 *sitānad*「取る」とは意味が異なる。一方で原文の前半最後の動詞 *rasānad*は「至らせる, 届ける」であるため, 意味を考えれば *bitür-*「実行する, 成し遂げる」は *yetür-*の誤記である可能性がある。P49 *yakē rā dād baxšiš tā rasānad yakē rā kard mumsik tā sitānad*. 後半は「ひとりには施すようにと贈り物を与えた, ひとりを奪うようにと吝嗇にした」。

44 (施しを) 行なう者は与えたことに気付かない 貯える者は努力して財を集めたことに気付かない

P50 *na baxšanda xabar dārad zi dādan na ānkas k-ō pađīraft az sitādan*. 後半は「受け取った者は取ることに気付かない」という意味である。

45 火はそれが燃やすことに気付いていない 水は自身が消すことを理解しない

P51 *na ātaš rā xabar k-ō hast sōzān na āb āgah ki hast az jān-furōzān*. 後半は「水は(自分が) 命を与えるもののひとつであることを知らない」。

46 かれは唯一の創造主で協働者はいない 我らはすべて命令に服する者 疑いはない

P52 *Xudā rā mulk bā kas muštarak nēst hama ḥammāl-i farmānand u šak nēst*. 前半は「神の王国は誰とも共有されない」。ペルシア語原文では後半の主語は「我ら」ではなく3人称複数である。

47 服する者の誰に勇気があるだろう 「その命令に従うな」と言ったとしても

P53 *kirā zahra zi ḥammālān-i rāhaš ki taxlītē kunad dar bār-gāhaš*. ペルシア語原文の後半は「かれの謁見場で錯乱するような(勇気が)」。

48 この地は産み出すがみずからは乳母を求めない 風は運ぶけれど(みずからは) 薫りを嗅がない

H 183 は誤ってこの行の番号を 45 とし, 以下も 3 づつずれた番号を示している。動詞 *yiyla-*については EDPT 890 / (*yidla:-*) および Słownik 91, F I 527 を参照<sup>54</sup>。ここでは先行する 46, 47 の内容を受けて, 地も風も神の命に服すだけの存在であることが述べられている。P54 *bisanjad xāk u mōyē bar nadārad biyārad bād u bōyē bar nadārad*. 前半は「地は量るが(みずからは) わずかばかりも受け取らな

<sup>52</sup> 第 42 対句とペルシア語原文との関係については Zajaczkowski (1962:367) で言及されている(ここでは正しく *yer üzrā* と写されている)。

<sup>53</sup> H 183 の転写 *yitürgey* が「失う」, 「至らせる」のどちらを意図したかは判断できない。

<sup>54</sup> 韻律と押韻を考慮するならば H 183 (fn. 7) が指摘するように音節末の *y* を脱落させた *yila-* のような形式であったことも考えられるが, 綴り字からはこの子音に対応する文字が確認される。

い」 という意味であろう。

49 これほどの造化をなした創造主の素晴らしさ 見よ 力強い全能の素晴らしさ

ペルシア語原文中の対応する行 P55 は *zihē qudrat ki* で始まるが、内容は大きく異なる。

*aflāk ḥarakātī-niḡ sözi*

- |   |  |
|---|--|
| <p>50 <i>falak sayyāḥ-larī aṅlar mu s(ä)n yār</i><br/> <i>bu miḥrāb iḥrā ma‘būdī bularniḡ</i><br/> <i>ne izlārlār bu yol t(a)rtmaq içindä</i><br/> <i>ne-din ḥābit bu ol ne munqalib nām</i><br/> <i>aḡiz b(a)ḡlap çeçäk teg tāza yüzlār</i></p> <p>55 <i>m(a)ḡa ḥayrat k(ä)lür bu işdin äy yār</i><br/> <i>bu ḥayrat kim tñlandurdī dīm-nī</i><br/> <i>bu munča n(ä)ḡgä<sup>57</sup> b(a)qma s(ä)n t(a)šingā</i></p> | <p><i>ne-din yer Ka‘ba-sinī č(ä)frülür</i><br/> <i>ne ol k(ä)zmäkdä<sup>55</sup> maḡsūdī bularniḡ</i><br/> <i>ne käl(ä)r (?) bar bu yük artmaq içindä</i><br/> <i>bu nēk yürir aṅa kim berdi ārām</i><br/> <i>t(a)punmaq-qa kamar baḡlanmīš özlār</i><br/> <i>b(ü)tüp bu butqa bansam beldä zunnār</i><br/> <i>‘ināyat ündädi Quṭb-i<sup>56</sup> ḥazīn-nī</i><br/> <br/> <i>kim anlar x<sup>w</sup>ad t(a)punmaz öz b(a)šingā</i></p> |
|---|--|

[3r/7]

- |  |   |
|--|---|
| <p><i>q(a)muḡ pargār teg b(a)š birlä gardān</i><br/> <i>āxir s(ä)n ham yetār elḡiḡ rawān bol</i></p> <p>60 <i>s(ä)n Ibrāḥīm teg ‘išḡ oyna but-ḡa</i><br/> <i>naḡar but-ḡa salip baḡlanma zunnār</i><br/> <i>körüngän kökdä yerdä b(a)rča jism ol</i><br/> <i>buzup alḡay ṭilism astında ganjin</i><br/> <i>ṭabāyi‘-larqa bir bir mīl t(a)rtḡil</i></p> <p>65 <i>bu köklār naḡšīṅa b(a)qma xayāl ol</i><br/> <i>m(a)ḡa ošbu falak siri bil(i)nmāz</i><br/> <i>agar bilmäk üçün bolsadi bu rāz</i><br/> <i>bu t(ä)zḡingüçi gunbad kim berür nūr</i><br/> <i>durust ol kim bu t(ä)zḡitgändä bārē</i></p> <p>70 <i>balē k(i)m tegmä ṭab‘ öz bilgāni bar</i><br/> <i>q(a)rī xatun kim ol č(ä)frür čiqirni</i><br/> <i>xalal t(a)pma sözüm-dä y(a)xšī b(a)qḡil</i></p> | <p><i>bolup öz xāliqin izdārlār äy jān</i><br/> <i>ne-din but-xāna q(a)pḡin qıldiḡ oš yol</i><br/> <i>kirip but-xāna iḥrā küymä ot-ḡa</i><br/> <i>qadam ur but üzrā qurtulduḡ äy yār</i><br/> <i>ilāhī ganj üzrā munlar ṭilism ol</i><br/> <i>ṭilism açmaq-qa ol kim t(a)rtsa ranjin</i><br/> <i>bilig köziḡä bir k(ä)z nīl t(a)rtḡil</i><br/> <i>bu muškil baḡ erür šāšmāk muḡāl ol</i><br/> <i>magar bu naḡš körnür<sup>58</sup> ma‘lūm ermāz</i><br/> <i>bu naḡš-larda[n] biri q(i)lḡay ārdi āwāz</i><br/> <i>körār biz t(ä)zḡinür özgä ne<sup>59</sup> bilnür</i><br/> <i>bar ol t(ä)zḡitmākindä ixtiyārē</i><br/> <i>bu t(ä)zḡingän-niḡ bir t(ä)zḡitgāni bar</i><br/> <i>qiyās et aṅlar s(ä)n bu čarx yerni</i><br/> <i>č(ä)fürmäsä anī č(ä)frülmāz uḡḡil<sup>60</sup></i></p> |
|--|---|

<sup>55</sup> H 184 kermekde.

<sup>56</sup> Z 20 Quṭb.

<sup>57</sup> Z 20 bu munča-nyḡ.

<sup>58</sup> Z 21, H 185 körünür.

<sup>59</sup> Z 21 özgāni.

<sup>60</sup> Z 21 oḡḡyl.

- bilig-lig-niñ eli č(ä)frür anī bil  
falak dawri hamēša bu qiyās ol  
75 agar körgüzmasä t(ä)ñri s(a)ña yoq<sup>61</sup>  
ne belgürgäy s(ä)niñ elgiñdä nāma  
agar ol bersä t(a)plur Hindūda hūr<sup>63</sup>  
qayu naqš üzrā körgüzsä jamālīn  
[3v/8]  
biri on arpanī mihrāb qilmış  
80 bu čarx āramī yoq kim t(i)nsa sā‘at  
bu arkān birlä b(ä)lgürgäy q(a)muğ yüz  
agar qudrat hawālat qılşañan s(ä)n  
agar ālat-qa qılşañ s(ä)n hawālat  
agar bu ot u tupraq yel birlä su  
85 bu yulduzlarda farmān t(a)pmaz erdi  
tan içrā bolmasa jān sözlämāz til  
bilig-lig x<sup>w</sup>ad bilür bu ne asās ol  
bu uşurlāb-i<sup>62</sup> hikmat-da y(a)ruqluq  
ne x<sup>w</sup>ad qılğay asığ b(a)şda ‘imāma  
agar bermäsä körmāz ay-da köz nūr  
qılur yulduzlar ol naqš üzrā fālīn  
biri tuč birlä uşurlāb qilmış  
qiyās et tuč-dīn arpadīn ne rāhat  
bu al-larqa qayu kim uysa us-suz<sup>64</sup>  
bahāna oşbu ālat qılşañan s(ä)n  
ne ālat bar idi qılğanda ne hīlat  
biri biri<sup>65</sup> birlä x<sup>w</sup>aş bolsa ārdi yığlu  
bu paykar lafzi-dīn jān bitmāz ārdi

## [3] 「諸天の動きの事」

50 友よ知っているか 天の旅人たちは なぜ地のカアバをとりまいて回るのか  
čävrül- 「(まわりを) 回る」. 類義の動詞 äwrül-が同様に対格目的語を伴う例  
は『聖者伝』に見られる: taqī yāti qadla māni äwrülgil 「7回わたしのまわりを回  
れ」 [TA 169v13]<sup>66</sup>. P56 xabar dārī ki sayyāhān-i aflāk čirā gardand gird-i Ka‘ba-i  
xāk. ペルシア語原文では前置詞 gird 「まわりに」が用いられている.

51 この祭壇の中でこれらが拝するもの かの巡りにおいてこれらの目指すもの  
が何であるのか

P57 dar īn mihrāb-gah ma‘būdašān kīst w-az īn āmad-šudan maqşūdašān čīst. 前半  
は「この祭壇の中で彼らの拝するのが誰であるのか」.

52 この道行において何を求めているのか この荷を積むことに何の益が (?)  
あるのか

kālār (*k’lr* と綴られ, ファトハ記号が2つ付されている)は, 発音・意味とも不  
明. H 184 は前の語とつなげて *nikeler* としている. ここでは F の読みと解釈に  
従った<sup>67</sup>. P58 čī mēx<sup>w</sup>āhand az īn maḥmil kašīdan čī mējōyand az īn manzil burīdan.  
後半は「この路程を辿ることから何を探しているのか」.

<sup>61</sup> H 185 yuk.

<sup>62</sup> MS ‘wşrl’b w.

<sup>63</sup> H 185 hīndūda hūr.

<sup>64</sup> Z 22, H 185 us söz.

<sup>65</sup> H 186 biri bir.

<sup>66</sup> cf. 菅原(2007:40).

<sup>67</sup> F は該当する語を項目としてあげていないが, I 557 (yük の項)でこの対句を引用し ‘chego  
ishchut na etom puti, kakaja pol’za ot togo, chto nagruzili eto gruz’ と訳している. Z 20 も ne kālār と写  
しているがやはり語彙集には見当たらない.

53 なぜこれは恒星 あれは遊星の名をもち これは常に動き あれには静止を与えたか

P59 *čirā īn θābit ast ān munqalib nām ki guft īn rā bijunb ān rā biyārām*. 後半は「これに動けと、あれに留まれと誰が命じたのか」.

54 口を結び、花のように清らかな顔で 崇めるために自ら帯を結んだか

*tāza yūzlār* はペルシア語原文の *dar tāza-rōyī* を訳したものである. P60 *qabā basta ču gul dar tāza-rōyī parastiš rā kamar bastand gōyī*. 行頭は「衣服を整え」.

55 この事から私に驚嘆がやって来る おお友よ この偶像を信じ腰に（異教徒の）帯を締めようか

Zajączkowski (1956:393) は後半部に *b*-による頭韻が見られることを指摘している. P61 *marā ḥayrat bar ān āwurd šad bār ki bandam dar čunīn butxāna zunnār* 「驚嘆は私を、このような偶像寺院で腰帯を締めることへと百度もいざなった」.

56 この驚嘆が信仰を消した時（神の）恩寵が悲しむクトゥブに呼びかけた

*tūjlandur*-を *Słownik* および *F* は「聴く」の使役としているが<sup>68</sup>, 文脈に合わない. ここでは *tūjlan-*がこの作品中の 15r10 で「休む」の意味で用いられていること<sup>69</sup>から考えて「鎮める, 消す」と解した. P62 *walē čūn kard ḥayrat tēz-gāmī ‘ināyat bāng bar zad k-ay Nizāmī* 「しかし驚嘆が歩を速めると、恩顧が呼び止めた：『ニザーミーよ』」.

57 このようなものにおまえは目を向けるな 彼らは自ら崇めることはしないのだから

P63 *mašaw fitna bar īn buthā ki hastand ki īn buthā na x<sup>w</sup>ad rā mēparastand*. 前半は「これらの像に惑わされるな」.

58 みなコンパスのように回転しながら 自らの創造主を求めている

P64 *hama hastand sar-gardān ču pargār padīd āranda-i x<sup>w</sup>ad rā ṭalabkār*.

59 今やおまえも力が及ぶならば出発せよ なぜ偶像寺院の戸口を道としたのか

「力が及ぶならば」と訳した *yetār elgiñ* は、文字通りには「お前の手が至る」. ペルシア語原文でも「手」を意味する *dast* が用いられている. P65 *tu nīz āxir ham az dast-i balandī čirā butxāna rā dar dar nabadī* 「今やおまえも高い境地にあるのなら<sup>70</sup> なぜ偶像寺院の扉を閉めないのか」.

60 おまえはイブラーヒームのように偶像と友誼を結ぶがよい（しかし）偶像寺院内に入って火に焼かれるな

この内容は預言者イブラーヒームが人々を偶像崇拜から正しい信仰に導こうとしたために火に焼かれそうになったことをふまえている. P66 *ču Ibrāhīm bā but*

<sup>68</sup> *tūjlandur*- ‘kazać słuchać, rozpowszechnić, (wiadomość)’ (*Słownik* 193); *tūjlandur*- ‘zastavit’ *slushat*’ (*F* II 397).

<sup>69</sup> *biraz tūjlandī yoldī[n] ārdi ranjūr* (= P876 *furō āsūd k-az rah būd rajūr*). cf. *Słownik* 193, *F* II 397. また『クマン語資料帳』に見られる *tyjla-* ‘ruhen’ (*Grønbech* 1942:262)も参照.

<sup>70</sup> この解釈は *az dast-i baland būdan = dārā-yi jāygāh-i rafī*’ (ed. *Zanjānī*, p. 1018)によった.

‘išq mēbāz walē butxāna rā az but bipardāz. 後半は「しかし偶像寺院から偶像を取り除け」.

61 偶像に目を向けて（異教徒の）腰帯を締めるな（しかし）偶像を足蹴にするならば救いを得る 友よ

P67 *naẓar bar but nihī šūrat-parastī qadam bar but nihī raftū u rastī*. 前半は「偶像に目を向ける（ならば）絵姿を崇める（ことになる）」.

62 天において地において見えるのはすべて物体にすぎない これらは神の宝にかかった呪文である

*kōkdā yerdā*「天において地において」はペルシア語原文の *az mah tā ba māhī*「月から魚まで」の訳として用いられている。「物体にすぎない」はペルシア語原文にない。「神の宝」に対してペルシア語原文には「神の宝の秘密」*sir-i ganj-i ilāhī*とある。P68 *namūdārē ki az mah tā ba māhī ast ʔilismē bar sir-i ganj-i ilāhī ast*.

63 呪文の奥の宝を勝ち取るであろう 呪文を解く苦難に耐える者は

クトゥブによるチュルク語テキストは主語の人称を原文の2人称単数から3人称に変え、半句の順序を入れ替えている。P69 *ʔilism-i basta rā bā ranj yābī ʕu biškastī ba zēraš ganj yābī*「結ばれた呪文を苦労しておまえは見出すだろう（それを）解いたならその下に宝を見出すだろう」.

64 諸元素にひとつひとつ針を刺せ 知性の目に（対して）ひとたび藍色を引け  
「針を刺す」は「盲目にする」を意味する。「藍色」はここでは知性の目を避けるための魔除けを意味すると考えたい。P70 *ʔabāyi‘ rā yak-ā-yak mīl dar kaš badīn xūbī xirad rā nīl dar kaš*. ペルシア語原文の後半は「この善により知性に藍色を引け」となっており「目」にあたる語はない<sup>71</sup>.

65 この諸天の姿形を見るな それは幻影である これは困難な結び目であり解くのは不可能である

*Nadzhip* は *bağ*「結び目」を「園」と解しているが誤りである<sup>72</sup>。ペルシア語原文の *band* に対応している。P71 *mabīn dar naqš-i gardūn k-ān xayāl ast gušādan band-i īn muškīl muhāl ast*. 後半は「この難事の結びを解くことは不可能である」.

66 私にこの天輪の神秘は知りえない この姿形が見える以外は不可知である

後半の内容は原文と合わず、また *bilinmāz* と *ermāz*（初頭の母音はカスラ記号付のアリフで表記されている）の押韻も不完全である。P72 *marā bar sirr-i gardūn rahbarī nēst juz ān k-īn naqš dānam sar-sarī nēst*「私に天輪の神秘について導きは存在しない この姿形がかりそめではないと知ることの他には」.

67 もしこの神秘が知られるためのものであったなら これらの姿形のひとつが声をあげたであろう

<sup>71</sup> ペルシア語エディションの注釈では「知性を、それがもつすべての善にもかかわらず、神の本質と創造の神秘を理解するうえで無と見なせ」*xirad rā bā hama-i xūbī ki dārad dar dar-yāft-i dāt-i Xudā u rāz-i āfarīnīš hēč angār* (ed. Zanjānī, p. 298)と解されている。

<sup>72</sup> ‘eto javljajetsja sadom, vzyvyvajushchim zatrudnenija’ (N 127).



Z 21 *naqš-lar-da*<sup>(m)</sup>および H 185 *naqšlarda[n]*に倣い、写本の *bu naqš-larda* 「これらの姿形において」(位格)を *bu naqš-lardan* 「これらの姿形から」(奪格)に訂正する<sup>73</sup>. *bolsadī* は *bolsa ārdi* からの縮約に由来する特徴的な形式である. H 17 および *Ata* (2003:51-52; 2004:XXVI)を参照. 一方後半に見られる *qilgay ārdi* は韻律に合わないため、作者による形式は同様の融合を経た *qilgaydī* であった可能性が考えられる. P73 *agar dānistānī būdī x<sup>w</sup>ad īn rāz yakē z-īn naqšhā dar dādī āwāz*. 68 光をもたらすこのめぐる穹窿 我々は(その)めぐりを見る、ほかに何が知られようか

P74 *az īn gardanda gunbadhā-yi pur-nūr ba-juz gardiš čī šāyad dīdan az dūr* 「光に満ちたこのめぐる穹窿から そのめぐり以外に遠くから何を見るべきか」.

69 事実は このめぐらせる者にはやはり めぐらせることへの意志が存在している

P75 *durust ān šud ki īn gardiš ba kārē ast dar īn gardandagī ham ixtiyārē ast*. 前半は「事実は、この回転はある働きのためである」.

70 まことにどの気質もが知っていることがある：この回る者には回す者がいる

P76 *balē dar ṭab‘-i har dānandaē hast ki bā gardanda gardānandaē hast* 「まことにどの知者の気質の中にも『回る者には回す者がいる』ということがある」.

71 老女が糸車を回すのを 比べてみるならこの輪の位置がわかるだろう

*čiqār ‘spinning-wheel’ (EDPT 410 / çığrı:)*. P77 *az ān čarxa ki gardānad zan-i pīr qiyās-i čarx-i gardanda hamē-gīr* 「老女が回すあの糸車とめぐる天輪とを比べるがよい」.

72 私の言葉に欠陥を見つけるな よく見るがいい それを回さなければ回らないと理解せよ

P78b *nagardad tā nagardānī nuxustaš* 「お前がまずそれを回さない限り回らない」. 前半の内容は一致しない.

73 知者の手がそれを回すと知れ 身体の中に魂がなければ舌は語らない

P79a *ču gardānad warā dast-i xiradmand*. 後半の内容は一致しない.

74 天のめぐりは常にこれに譬えられる 知性ある者はまさに知る これがいかなる原理であるか

P80 *hamīdūn dāwr-i gardūn z-īn qiyās ast šināsad har ki ō gawhar-šinās ast*. 後半は「本質に通じている者は誰もが知る」.

75 もし神がお前に示さなければ この叡智の星盤に光明はない

前半最後の語を H 185 は *yuk* とするが、意味は示していない. Z 21 のように *yoq* 「ない」と読めば上のような意味になるが、その場合ペルシア語原文の内容とは異なる. この *yoq* がなければ「もし神がお前に対しこの叡智の星盤に光明を示さなければ」となって原文の内容に適合する. 「星盤」と訳した *ušturlāb* 「ア

<sup>73</sup> ペルシア語原文でも *īn naqšhā* 「これらの姿形」は前置詞 *z* 「から」を伴っている.

ストロラーベ」は天体観測器の名。テキスト中でそれまでに言及されていないため、写本にある *bu ušurlāb u hikmat* 「この星盤と叡智」という表現は意味をなさない。ペルシア語原文は *ušurlāb-i fikrat* 「思索の星盤」であり、チュルク語も同じくエザーフェによる *bu ušurlāb-i hikmat* 「この叡智の星盤」の誤りであると判断される<sup>74</sup>。P 81 *agar n-ārad namūdār-i Xudāyī dar ušurlāb-i fikrat rōšanāyī* 「もし神の顕現が思索の星盤に光明をもたらさなければ」。

76 おまえの手にある書は何を現わすか 頭に巻いたターバンが何の役に立つか

P82 *na z-abrō jastan āyad nāma-i naw na az ā0ār-i nāxun jāma-i naw* 「眉の痙攣が新しい手紙の、爪の斑点が新しい服の予兆にはならない」の内容と大きく異なる。

77 もしかれが与えればインドに天女が見出される もし与えなければ目は月に光を見ない

Hindū は正確には「インド人」を意味するが、ペルシア語原文の *Ḥabaš* 「アビシニア」に対応している。仮定形 3 人称 *bersā* 「与えれば」、*bermāsā* 「与えなければ」はペルシア語原文では 2 人称単数を用いて「かれから求める」、「求めない」と表現されている。P83 *az-ō jōyī biyāyī [var. biyābī] dar Ḥabaš hūr nayābī čūn na z-ō jōyī zi mah nūr*<sup>75</sup>。

78 (神が) ある姿形のうゑにその美を示せば 星々はその姿形によって吉凶を占う

P84 *ba har naqšē ki binmūd ō jamālē giriftand axtarān z-ān naqš fālē*。

79 ある者は 10 粒の大麦を祭壇とした ある者は青銅で星盤を作った

P85 *yakē dah dāna jaw mihrāb karda yakē sangē du ušurlāb karda*。後半は「ある者は 2 つの石を星盤とし」を意味する。

80 この天輪にはひとときも休む暇はない 比べてみよ 青銅から大麦から何の安楽があるか

*tīn*-「休む」は EDPT 514 l, Słownik193, F II 395 を参照。P86 *zi gardišhā-yi īn čarx-i sabuk-raw hamān āyad k-az ān sang u az ān jaw* 「このせわしい天輪の回転からあの石・あの大麦からと同じものが来る」。

81 「これらの要素 (だけ) によりすべての顔は具現する」 この欺きに従う者は誰でも無分別である

最後の語は *ussuz* 「知恵がない、分別がない」であって Z 22, H 185 の *us sōz* ではない。cf. F II 445<sup>76</sup>。P87 *magō z-arkān padīd āyand mardum čūnān k-arkān padīd āmad zi anjum* 「言うな、『人間は要素から具現する 要素が星々から具現したように』と」。

82 もし (神の) 全能を (何かに) 依拠させるならば この手段が要因であると

<sup>74</sup> cf. Z 21 *bu ušurlāb vā hikmāt*, H 185 *bu usturlāb ve hikmet*。

<sup>75</sup> 第 77 対句とペルシア語原文との関係については Flemming (1974:214) で言及されている。

<sup>76</sup> N はこの語を見出し語としていないが、p. 383 (*uymaq* の項) でこの対句の後半を引用し「誰が無分別にもこの欺きに屈するか」*‘Kto bezrassudno poddajotsja etim xitrostjam’* と訳している。

するならば

接尾辞-sağan については H 151, F II 713-714, Ata (2002:82-83)を参照. P88 ki qudrat rā ḥawālat karda bāšī ḥawālat rā ba ālat karda bāšī 「(神の) 全能を依拠させたことになる 手段に依拠させたことになる」.

83 もし手段に依拠させるのならば 主が(創造を) なされた時, 手段も策もなかった (ではないか)

N 407 (ezi [eʒu]の項)は後半を Ne alāt bar ezi qılğanda hillāt と転写し, ezi を動詞 e-「ある」の過去形 3 人称単数としている. P89 agar takwīn ba ālat šud ḥawālat či ālat būd dar takwīn-i ālat. 後半は「手段の創造の際にはどんな(別の)手段があったか」.

84 もしこれらの火・土・風・水が 互いに集まり調和していたとしても

P90 agar či xāk u bād u āb u ātaš kunand āmad-šudē bā yak-digar x<sup>w</sup>aš. 後半は「対立しながらも互いに調和している」.

85 これらの星に(神の) 命令を見出さなかつたろう この似姿のことばから命は育たなかつたろう

意味がとりにくく, tapmaz erdi (e はカスラ記号付のアリフで表記) と bitmāz ārdi との押韻も不完全である. またペルシア語原文との関係もはっきりしない<sup>77</sup>. 中期キプチャク語文献に見られる bit-「育つ」については EDPT 298 r-299 l (büt-), F I 251 を参照. 後半に見られる lafz 「ことば」はペルシア語原文の異文 luṭf 「優美」を誤記したものか<sup>78</sup>. P91 hamē tā z-ō xaṭ-i farmān nayāyad ba na‘š-i [var. luṭf-i] hēč paykar jān nayāyad 「かれから命令の書状が来ない限り いかなる似姿の死体にも命はやって来ない」.

t(ä)ḡri ta‘ālā-niḡ munājātī

iḡi kim bizni b(a)lčiq-dīn yugurdi	m(a)ḡa qul-luq qiliḡ teyü buyurdi
q(a)muḡ-qa xiḡmatini farḡ qildi	jazāsini öziḡa qarḡ qildi
biz emdi bu ḡa‘if-luq birlä äy ḡaq	tilär biz kim s(a)ḡa qulluq-ni qilsaq
‘ināyat-lar kim oš munča s(ä)niḡ bar	ḡa‘if qulni q(a)čan ḡäyi‘ qoyar zār
90 um(i)nč-lar kim tutar biz munča miḡ šāx	karam-lariḡ qilur bizläri gustāx
yoq ārsä bir avuč tupraq ne <sup>79</sup> qilḡay	özi ḡaddinča andin iš [ne] qilḡay
xalāš ber <sup>80</sup> özümizdin č(ä)frālim yüz	t(a)qi tawfiq birlä köḡlümüzni <sup>81</sup> tüz
q(a)čan läyiq t(a)puḡ bizdin t(a)puḡay	kim ol ḡadrat-qa x <sup>w</sup> ad šäyista bolḡay

<sup>77</sup> ペルシア語原文では farmān と jān とが押韻しており, この押韻がチュルク語訳でもそのまま保たれていたと仮定すると, 前半と後半の句末には本来は同一の動詞があったことになる.

<sup>78</sup> ḡ を表わす文字は ṭ を表わす文字に 1 点を加えたものである.

<sup>79</sup> Z 22 tobraq-ny, H 186 toprakni.

<sup>80</sup> H 186 bin.

<sup>81</sup> H 186 köḡlümüzni.

- walē küç y(ä)tmiş(i)nçä qılğu qulluq bizä<sup>82</sup> qulluqđın özgä tegmäz fuđılluq  
 95 agar bolsañ avuç tupraq-da x<sup>w</sup>ašnüd s(a)ña bolmaz ziyān bizgä bolur sūd  
 oşol sā‘at-da kim bolğay qiyāmat b(a)ğışla bizni qıldurma nadāmat  
 m(ä)n ol tupraq m(ä)n oş k(i)m s(ä)n yagāna y(a)ratıp jism t(a)pşurduñ bu jāna  
 [4r/9]
- y(a)rat[t]iñ şuratım-ni qaıra s(u)v-din y(a)ratıǵlardın üdrüp berdiñ oş dīn  
 bu şurat berdiñ emdi közgä ber nūr bu ni‘mat şukrini köñlüm-dä artur  
 100 q(a)tıǵ-lıq-da şabr ber kim yilayin (?) äsän-lik-dä s(ä)niñ şukriñ qılayin  
 üküş haddin<sup>83</sup> keçä taqşır qıldim xijālat-ni şaftı<sup>84</sup> qılğuga keldim  
 ne sawwē kim tüşär bolsa sözüm-dä ‘afw qıl bar üküş taqşır özüm-dä  
 ne naqşē kim körär m(ä)n ma‘būdum s(ä)n  
 bu sar-gardān-liqim oş b(a)rça sendin ne ħarfē kim oqır m(ä)n maqsūdum s(ä)n  
 105 s(a)ña xiđmat qılay tep ‘azm qıldim birär ablah birär ‘āqil tiläkin  
 niyat Ka‘ba t(a)pa qıldi bu özüm yol azdım ärsä köndür m(ä)n yañıldim  
 ne ädgü ne y(a)man kim xalq ara bar agar bādiya-da ölsäm mā rōzum  
 birin ündäp ađaqin sindurur s(ä)n karam qılsañ körünmāz đarra-ča yār  
 jānim bilmāz bu munča q(a)đǵular yep q(a)vup biri-niñ q(a)natın ündürür s(ä)n
- özüm maqbül mu maħrūm mu ne<sup>85</sup> m(ä)n tep  
 110 yazuqluǵ m(ä)n qayu naw‘ icrā ölsäm meni s(ä)n y(a)rliqa ne türlü bolsam  
 qıl öz fađliñni ‘āşī qul bilä yār m(ä)nim fi‘lim-gä<sup>86</sup> b(a)qma äy bir u bar<sup>87</sup>  
 bu fi‘lim-nuñ tiläkindä yoq ol küç s(ä)niñ fađliñ gawhar qul fi‘li çin tuç<sup>88</sup>  
 hidāyat nūrini köñlüm-din alma y(a)na m(ä)ni q(a)rañguluq-qa salma  
 bilig-lig qıl q(a)muǵ işdä özümni ketär ğaflat niqābin aç közümni  
 115 çıqar köñlüm-din äsrüklük süsini ketär m(ä)ndin bu ğaflat uyqusini  
 tanim-gä ber qanā‘at jānğa qul qıl mizājim birlä tã‘at mu‘tadil qıl  
 ulaş<sup>89</sup> xiđmatqa rāđi qıl tan u jān kişi-kä qılma ħājat-liğ qıl iħsān  
 anıñ teg tut m(ä)ni s(ä)n barliqim-da kim ol x<sup>w</sup>ašnüdluquñ bolsun q(a)tım-da<sup>90</sup>  
 [4v/10]
- bu dunyā işlarindin qıl farāğat s(ä)n oq bil x<sup>w</sup>ad s(a)ña aymaq ne ħājat  
 120 bu köñlüm iğniñ tımār qılǵıl m(a)ña haddimča taklif-i<sup>91</sup> yār qılǵıl

<sup>82</sup> Z 23 biz.

<sup>83</sup> Z 23 ħaddydyn.

<sup>84</sup> H 187 şef‘i.

<sup>85</sup> Z 23 muny.

<sup>86</sup> H 187 fi‘lime.

<sup>87</sup> Z 24 berü jār.

<sup>88</sup> H 187 fi‘l için tuç.

<sup>89</sup> Z 24 üläş, H 188 üleş.

<sup>90</sup> H 188 katımca.

ičimni öz nūruḡ birlā y(a)ruḡ tut  
dimāḡīm-nūḡ iḡiḡā s(ä)n dawā qīl

b(a)šimni s(ä)n öz astānīḡda<sup>92</sup> oḡ tut  
qiyāmat-da šafi‘im Muṣṭafā qīl

[4] 「至高の神への祈願」

86 我らを泥から捏ね上げた主は われにしもべとして仕えよと命じた

ペルシア語原文は神への呼びかけで始まり、動詞は2人称単数形が用いられている。P96 *Xudāyā čūn gil-i mā rā sirištī waθīqat-nāmaē bar mā niwištī*. 後半は「(そなたは) 我らのために契約書を書いた」.

87 すべての者にかれへの奉仕を義務とした それに報いることを自身に債務とした

「すべての者に」はペルシア語原文では「我らに」。前の行と同じく動詞は2人称単数形で表わされている。P97 *ba mā bar xidmat-i x<sup>w</sup>ad farḡ kardī jazā-yi ān ba x<sup>w</sup>ad bar qarḡ kardī*.

88 おお神よ 我らは今 この弱さとともに 御身に僕として仕えようと願う

P98 *ču mā bā ḡa‘f-i x<sup>w</sup>ad dar band-i ānēm ki bigzārēm xidmat tā tuwānēm*. 最後の *tā tuwānēm* は「できる限り」.

89 御身のもつまさにこれほどの恩寵は 弱い僕をいつ哀れでみじめに放り出すだろうか

P99 *tu bā čandān ‘ināyathā ki dārī ḡa‘īfān rā kujā ḡāyi‘ ḡuḡārī*. 前半は「そなたは、御身のもつこれほどの恩顧とともに」.

90 我らがいだくこれほど多枝の希望と 御身の寛大さが我らを勇気づける

*miḡ šāx* 「1000の枝」はペルシア語原文の *šāx dar šāx* 「枝分かれした、多種多様な」に対応している。P100 *badīn ummēdhā-yi šāx dar šāx karamhā-yi tu mā rā kard ḡustāx*.

91 さもなければ一握りの土に何ができよう 自らの分限で何の業ができよう

後半では韻律と押韻を考慮して *iš* の後に *ne* 「何」を補う必要がある。*andīn* 「彼・それから」の指す対象ははっきりしない。P101 *wagar na mā kudāmīn xāk bāšēm ki az dēwār-i tu rangē tarāšēm* 「さもなければ我らはどの土であるだろうか、御身の壁から色を削り取るとは」。「壁から色を削り取る」は「利益を得る」の意味であるという<sup>93</sup>.

92 (我らを) 解き放て 我ら自身から顔を背けよう さらに神佑により我らの心を正せ

P102 *xalāšē dih ki rōy az x<sup>w</sup>ad bitābēm ba xidmat kardanat tawfiḡ yābēm*. 後半は「御身への奉仕のための神佑を見つけるべく」.

93 相応しい奉仕がいつ我々から見つかるだろう かれの御前にこそ似つかわし

<sup>91</sup> Z 24 tāklīf.

<sup>92</sup> Z 24 asta neḡdā.

<sup>93</sup> *az dēwār-i kasē rangē tarāšīdan = az kasē fāyida giriftan* (ed. Zanjānī, p. 1018).

い（奉仕が）

P103 *zi mā x<sup>w</sup>ad xidmatē šāyista n-āyad ki šādurwān-i ‘izzat rā bišāyad* 「我らから似つかわしい奉仕は来ない，栄光の帳にそぐわしい（奉仕は）」。

94 しかし力の及ぶ限り奉仕すべきである 奉仕以外の余計なことは我らに関わらない

95 もし一握りの土に喜ぶなら 御身に損失はなく我らには益がある

P106 *wagar gardī zi muštē xāk x<sup>w</sup>ašnūd turā nabwad ziyān mā rā buwad sūd.*

96 最後の審判が訪れるその時 我らを赦せ 後悔させるな

P107 *dar ān sā‘at ki mā mānēm u hō‘ē zi baxšāyis furō magdār mō‘ē.* 後半は「髪の毛ひとすじほども御慈悲から遠ざけるな」。

97 私は土であり 唯一である御身が 形として造りこの魂に引き渡した

P109 *man ān xākam ki mağzam dāna-i tu-st badīn šam‘ē dilam parwāna-i tu-st.* 最初の「私は土である」だけがチュルク語訳と共通する。

98 御身は我が姿を一滴の水から創った 被造物から選び出しこの信仰を授けた

P110 *tuyī k-awwal zi xākam āfarīdī ba faḍlam z-āfarīniš bar guzīdī* 「御身ははじめに土から私を創った方 お恵みにより私を（他の）創造物から選び出した方」。

99 御身はこの姿を与えた。今や目に光を与えよ 我が心にこの恩寵への感謝を増やせ。

P111 *ču rōy afrōxtī cašmam bar afrōz ču ni‘mat dādīyam šukrat dar āmōz* 「御身は（私の）顔を輝かせたように私の眼も輝かせよ。私に恩寵を与えたように感謝を教えよ」。

100 苦難にあっては忍耐を与えよ (...) 健やかさにあっては御身への感謝をしよう

前半の最後の語は Z 23 *jylajyn*, H 187 *yılaym* のように写されているが、ともに意味は示していない<sup>94</sup>。ペルシア語原文では *tā pāy dāram* 「私が耐えるように」とあるが、これと似た意味のチュルク語動詞で該当するものは見当たらず、誤訳・誤記の可能性がある。P112 *ba saxtī šabr dih tā pāy dāram dar āsānī makun farmōš-kāram.* 後半は「健やかさにあっては私を忘恩の徒にするな」。

101 私は限度を超えて多くの過失を行なった 恥を仲裁人とするべく来た

P115 *ba taqšīrē ki az ḥad bēš kardam xijālat rā šaftī-i x<sup>w</sup>eš kardam* 「私が限度を超えて行った過失に対して、恥を自らの仲裁人とした」。

102 私の言葉にどんな過ちが生じようと 赦せ 自分には多くの過失がある

P116 *ba har sahwē ki dar guftāram uftad qalam dar kaš k-az ān bisyāram uftad.* 過ちを「筆で消せ」と表現されている。

103 どんな姿形を私が見ても 私が崇めるのは御身 どんな文字を私が読んでも 私のめあては御身

<sup>94</sup> Słownik, F ともこの動詞を見出し語としてあげていない。

P119 turā jōyam zi har naqšē ki dānam tu maqšūdī zi har ḥarfē ki x<sup>w</sup>ānam. 前半は「私が知るどの姿形からも私は御身を探す」。

104 私のこの困惑はすべて御身から 愚か者の 賢者の願いを (?)

後半の意味ははっきりしない<sup>95</sup>. P120 zi sar-gardānīyam dān [var. sar-gardānī-i tu-st] īn ki paywast ba har nā-ahl u ahlē dar zanam dast. 異文によれば「そなたへの困惑からである 私が常に あらゆる無能な者・有能な者の扉を叩くのは」といった意味になると思われ、少なくとも前半はチュルク語訳に近い内容となる。

105 御身に奉仕をしようと心を決めた 道はずれたならば正せ 私は誤ったのだ

P121 ba ‘azm-i ḥaḍratat [var. xidmatat] bar dāštam pāy gar az rah yāwa gardam rāh binmāy. 後半は「もし道はずれたならば道を示せ」。

106 私自らカアバに向け意志を固めた たとえ荒野で死ぬとも (それが) 私の運命だ

(bu) özüüm 「私自身」はペルシア語原文の jānam 「私の命・魂」を訳したものとされるが、ペルシア語 jānam 同様に文法的には3人称として扱われていることが注目される。-sā mā については古代チュルク語-sAr ymä (Erdal 2004:495)と比較せよ。P122 niyat bar Ka‘ba āwurda-st jānam agar dar bādiya mīram nadānam. 後半は「もし荒野で死ぬとも 私は知らない」。

107 人々の間にあるいかなる善も悪も 御身が寛大さをなすならば些かも見えない

最後の yār は不明<sup>96</sup>. P123 ba har nīk u badē k-ān dar miyāna ast karam bar tu-st u ān dīgar bahāna ast. 後半は「恩恵は御身にあり、その他は口実である」。

108 ひとりと呼びその足を挫く ひとりを追ひ払いその翼を育てる

P124 yakē rā pāy biškastī u x<sup>w</sup>āndī yakē rā bāl u par dādī u rāndī 「ひとりの足を挫き呼んだ、ひとりに羽根を与え追ひ払った」。

109 私の魂は知らない これほどの悲しみを味わいながら 自身が受け入れられているのか締め出されているのか どちらなのかと。

P125 nadānam tā man-i miskīn čī nāmam zi maqbūlān u maḥrūmān kudāmam. 前半は「哀れな私が何者なのか私は知らない」。

110 私は罪人である (が) どのような状態で死のうとも どのようなであっても 御身が私を赦せ

P126 agar dīndāram u gar x<sup>w</sup>ad-parastam [var. but-parastam] biyāmurzam ba har naw‘ē ki hastam. ペルシア語原文前半は「私が敬虔であっても自惚れ [異文：偶像崇拜者] であっても」という意味である。

<sup>95</sup> FI 15 (ablah の項)は後半を‘zhelanija glupogo i zhelanija umnogo (gospod’) udovletvorjajet’ 「愚か者と賢者の願いを (主は) かなえる」と訳すが、従い難い。

<sup>96</sup> FI 404 (zārrāčā の項)は後半を‘okazhi milost’, (ved’) ne vidno i s krupitsu pomoshchi’ 「慈悲を示せ、僅かの援けも見えない」と訳すが、受け入れ難い。

111 御身の寛容を不服従の僕に友とせよ 私の行ないを見るな 唯一で自存する御方よ

P127 *ba faḍl-i x<sup>w</sup>ēš faḍlē kun marā yār ba ‘adl-i x<sup>w</sup>ad makun bā fi‘l-i man kār* 「御身の寛容で、寛容を私の友とせよ 私の行為に御身の正義で対処するな」.

112 私のこの行為の願いにはその力がない 御身の寛容は宝石 しもべの行為は真の青銅

*tilāk* 「願い」は文脈に合わず誤記の可能性はある。ペルシア語原文に即して解釈すれば「御身の寛容の宝石に対してしもべの行為を青銅とするだけの力もない」ということであろう。P128 *nadārad fi‘l-i man ān zōr-bāzū ki bā sang-i [var. faḍl-i] tu bāšad ham-tarāzū* 「私の行ないには 御身の分銅 [異文：寛容] に釣り合うだけの力はない」.

113 導きの光を私の心から奪うな 再び私を暗闇に投げるな

P114 *hidāyat rā zi man parwāz mastān ču awwal dādī āxir bāz mastān.* 後半は「初めに与えて、後に再び取り上げるな」.

114 私自身を万事に通曉させよ 怠りのヴェールを取り去り私の目を開け

P113 *šināsā kun ba ḥikmathā-yi x<sup>w</sup>ēšam bar afkan burqa‘-i ḡaflat zi pēšam* 「私を御身の叡智に通曉させよ、怠りのヴェールを私の前から取り去れ」.

115 私の心から酔いの軍勢を追い出せ 私からこの怠りの眠りを取り去れ

P135 *dil-i mast-i marā hušyār gardān zi x<sup>w</sup>āb-i ḡaflatam bēdār gardān* 「私の酔った心を正気に戻せ、私を怠りの眠りから目覚めさせよ」.

116 私の身体に満足を与え（それを）魂にしもべとせよ 私の気質と勤行とを調和させよ

P138 *tanam rā dar qanā‘at zinda-dil dār mizājam rā ba ṭā‘at mu‘tadil dār* 「私の身体を満足の中で健やかに保て、私の気質を勤行に調和させよ」.

117 常に身体と魂を奉仕に満足させよ 他人を必要とさせるな 慈善を与えよ

*ulaš* 「常に」については *Slownik* 197, F II 435, N 352 を参照<sup>97</sup>. P130 *ba xidmat xāš kun xursandīam rā ba kas magḍār ḥājatmandīam rā.* ペルシア語原文の前半は「私の満足を奉仕に専念させよ」. また「慈善を与えよ」にあたる表現は見られない.

118 私が存在するあいだ私を 傍に御身の満足があるように保て

P131 *čunān dāram ki dar nābūd u dar būd čunān bāšam ki bāšī z-ān tu x<sup>w</sup>ašnūd* 「存在と非存在において私を、御身が満足するようなあり方に保て」.

119 この世の事柄から（私を）解き放て 御身こそが知れ 御身に言う必要があらうか

P132 *farāgam dih zi kār-i īn jahānī ču uftad bā tu kār āngah tu dānī.* 後半は「事が御身に関わるならば、その時御身は知る」.

120 この心の病を気にかけてよ 私に対し分に応じて [荷を] 課せ

<sup>97</sup> これらには示されていないが、ラブグズィー『預言者たちの物語』にも例がある (Rbg, p. 674).



後半は意味が明確ではない<sup>98</sup>。ペルシア語原文では「私の力に合わせて私に荷を課せ」となっており、チュルク語訳の *yār* は *bār* 「荷」の誤記である可能性が高い<sup>99</sup>。P133 *manih bēš az kašiš tīmār bar man ba qadr-i zōr-i man nih bār bar man*. 前半では *tīmār* という語が共通しているが内容は全く異なる。

121 私の内面を御身の光で明るく保て 私の頭を御身の戸口に留めよ

P134 *čirāgam rā zi fayḍ-i x<sup>w</sup>ēš dih nūr saram rā z-āstān-i x<sup>w</sup>ad makun dūr* 「私の灯に御身の恩寵から光を与えよ 私の頭を御身の戸口から遠ざけるな」。

122 私の意識の病をそなたが癒せ 裁きの日には(預言者)ムスタファーを私の仲裁者とせよ

P139 *dimāg-i dardmandam rā dawā kun dawāš az xāk-i pā-yi Muṣṭafā kun*. 後半は「ムスタファーの足の土により癒せ」。

### 3 結びに代えて

本稿で検討した部分は作品の導入部であり、ホスロウとシーリーンの世界には属さない、むしろ一般的な内容のものである。にもかかわらずクトゥブ作品がニザーミーによるペルシア語原作の内容をかなりの程度まで忠実に再現していることが確認された。原作との対照を今後さらに進めることにより、クトゥブ作品の性格とその成立の背景がより詳しく解明されるであろう<sup>100</sup>。

### 参考文献

- Ata, Aysu (2002) *Harezm - Altın Ordu Türkçesi* (Türk Dilleri Araştırmaları Dizisi 36). İstanbul.
- Ata, Aysu (2003) İlk Türkçe Kuran tercümesi. In: Aysu Ata - Mehmet Ölmez (eds.) *Dil ve Edebiyat Araştırmaları Sempozyumu 2003. Mustafa Canpolat Armağanı*, 41-55. Ankara.
- Ata, Aysu (2004) *Türkçe İlk Kur'an Tercümesi (Rylands Nüshası) Karahanlı Türkçesi* (Giriş-Metin-Notlar-Dizin). Ankara: Türk Dil Kurumu.
- Borovkov, Aleksandr Konstantinovich (1963) *Leksila sredneaziatskogo Tefsira XII-XIII vv.* Moskva: Izdatel'stvo Vostochnoj Literatury.
- Bürgel, Johann Christoph (1967) Rev. of Ananiasz Zajączkowski, *Najstarsza Wersja Turecka Husräv u Šīrīn Quṭba*. *Oriens* 20: 288-291.
- Clauson, Sir G. (1972) *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*.

<sup>98</sup> F II 655 (had(d) の項) は 'mne okazhi po vozmozhnosti pomoshch'' 「可能な限りの援けを私に示せ」と訳している (エザーフェなしで *taklif yār qilgil* と写している)。

<sup>99</sup> これら2つの語のアラビア文字表記は、最初の文字の下点が2つか1つだけで区別される。

<sup>100</sup> 残りの部分についても、同様にペルシア語原作との対照にもとづく転写テキストを順次提出する予定である。

- Oxford: Clarendon Press. [EDPT]
- DeWeese, Devin (2005) The predecessors of Navā'ī in the *Funūn al-Balāghah* of Shaykh Aḥmad b. Khudāyād Tarāzī: a neglected source on Central Asian literary culture from the fifteenth century. *TUBA* 29: 73-163.
- Doerfer, Gerard (1963) *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen I. Mongolische Elemente im Neupersischen*. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Eckmann, János (1964) Die kiptschakische Literatur. In: L. Bazin et al. (eds.) *Philologiae Turcicae Fundamenta II*, 275-304. Wiesbaden: Aquis Mattiacis apud Franciscum Steiner.
- Erdal, Marcel (2004) *A Grammar of Old Turkic*. Leiden - Boston: Brill.
- Fazylov, Ergash Ismailovich (1966, 1971) *Starouzbekskij Jazyk: Xorezmijskie Pamjatniki XIV Veka I/II*. Tashkent: Izdatel'stvo "Fan" Uzbekskoj SSR.
- Flemming, Barbara (1965) Fahrīs Ḥusrev u Šīrīn vom Jahre 1367: Eine vergessene türkische Dichtung aus der Emiratszeit. *ZDMG* 115 (1): 36-64.
- Flemming, Barbara (1974) *Fahrīs Ḥusrev u Šīrīn: eine türkische Dichtung von 1367*. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Flemming, Barbara (2006) Old Anatolian Turkish poetry in its relationship to the Persian literary tradition. In: Lars Johanson and Christiane Bulut (eds.) *Turkic-Iranian Contact Areas: Historical and Linguistic Aspects*, 49-68. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Grønbech, Kaare (1942) *Komanisches Wörterbuch. Türkischer Wortindex zu Codex Cumanicus*. København: Munksgaard.
- Hacıeminoğlu, M. Necmettin (1968) *Kutb'un Husrev ü Şirin'i ve Dil Hususiyetleri*. İstanbul: İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Türk Dili ve Edebiyatı Bölümü (repr. 2000 Ankara: Türk Dil Kurumu).
- Nadzhip, Emir Nadzhipovich (1979) *Istoriko-sravnitel'nyj Slovar' tjurkskix Jazykov XIV Veka: na Materiale «Xosrau i Shirin» Kutba*. Moskva: Glavnaja Redaktsija Vostochnoj Literatury.
- Nadzhip, Emir Nadzhipovich (1989) *Issledovanija po Istorii tjurkskix Jazykov XI-XIV vv.* Moskva: Glavnaja Redaktsija Vostochnoj Literatury.
- Nizāmī Ganjawī, *Xusraw u Šīrīn*. ed. by Waḥīd Dastgirdī. Tahrān: Kitābfurōšī-i Ibn Sīnā 1333.
- Nizāmī Ganjawī, *Xusraw u Šīrīn*. ed. by Barāt Zanjānī. Tahrān: Mu'assasa-i Intišārāt-i Dānišgāh-i Tahrān 1390 (2nd ed.).
- Nizami Gjanzhevi, *Xosrov u Shirin*. ed. by Lev Aleksandrovich Xetagurov. Baku: Izdatel'stvo Akademii Nauk Azerbajdzhanskoj SSR 1960.
- ニザーミー 『ホスローとシーリーン』 岡田恵美子 (訳) 平凡社東洋文庫 1977.
- Nizami Gjanzhevi, *Sobranie Sochinenij v Trex Tomax*. sostavitel': R. M. Aliev. Baku: Azerneshr 1991.

- Nizamî, *Hüsrev ve Şirin*. trans. by Sabri Sevsevil. İstanbul: Millî Eğitim Bakanlığı Yayınları 1994.
- Al-Rabghūzī, *The Stories of the Prophets (Qiṣaṣ al-anbiyā')*. *An Eastern Turkish Version* I. ed. by H. E. Boeschoten, M. Vandamme and S. Tezcan. Leiden: E. J. Brill 1995. [Rbg.]
- 菅原睦 (2003) 『サングラーフ』における幽霊語について 『西南アジア研究』 59: 23-38.
- 菅原睦 (2007) 『ウイグル文字本「聖者伝」の研究 I. 序論と転写テキスト』神戸市看護大学.
- 菅原睦 (2009) 「中央アジアにおけるテュルク語文学の発展とペルシア語」森本一夫 (編著) 『ペルシア語が結んだ世界—もうひとつのユーラシア史—』 131-14. 北海道大学出版会.
- Sugahara, Mutsumi (2015) Off-glide denasalization of /ŋ/ in Middle Turkic. In: Aysima Mirsultan, Mihriban Tursun Aydın, Erhan Aydın (eds.) *Eski Türkçeden Çağdaş Uygurcaya. Mirsultan Osman'ın Doğumunun 85. Yılına Armağan*, 177-188. Konya: Kömen Yayınları.
- Usta, Halil İbrahim (2011) *Orta Asya Kur'an Tefsiri (Metin-Tıpkıbasım)*. Ankara.
- Zajaczkowski, Ananiasz (1954) Zabytek językowy ze Złotej Ordy, Hüsrev u Şirin Qutba. *RO* 19: 45-123.
- Zajaczkowski, Ananiasz (1956) Starejšhaja tjurkskaja versija poemu Xosrev-u-Shirin Kutba. In: Felix Tauer, Věra Kubíčková, Ivan Hrbek (eds.) *Charisteria Orientalia praecipue ad Persiam pertinentia -- Ioanni Rypka*, 387-396. Praha: Nakladatelství Československé Akademie Věd.
- Zajaczkowski, Ananiasz (1958a) *Najstarsza Wersja Turecka Husräv u Şirîn Qutba I-III*. Warszawa: Państwowe Wydawnictwo Naukowe.
- Zajaczkowski, Ananiasz (1958b) Sur quelques proverbes turcs du “*Hüsrev-u-Şirîn*” de Nizami. In: János Eckmann, Agâh Sırrı Levend & Mecdut Mansuroğlu (eds.) *Jean Deny Armağanı*, 349-355. Ankara: Türk Dil Kurumu.
- Zajaczkowski, Ananiasz (1961) *Studia nad stylistyką i poetyką tureckiej wersji Husräv u Şirîn Qutba I*. Powtarzanie zwrotów stylistycznych. *RO* 25: 31-82.
- Zajaczkowski, Ananiasz (1962) Sur quelques termes cosmographiques et ethniques dans le monument littéraire de la Horde d'Or. *AOH* 15: 361-368.
- Zajaczkowski, Ananiasz (1963) *Studia nad stylistyką i poetyką tureckiej wersji Husräv u Şirîn Qutba II*. Paralelizm w obrazowaniu a układ dwudzielny wiersza. *RO* 27: 7-44.
- Zajonchkovskij, A. (1962) «Maslo ochej» - tjurkskoje köz jayy (iz istorii persidsko-turetskix literaturnyx vzaimootnošenij). In: A. I. Falina (ed.) *Bližnij i Srednij Vostok: Sbornik Statej*, 56-62. Moskva: Izdatel'stvo Vostočnoj Literatury.

**The introduction of Quṭb's *Khusraw u Shirin*  
a comparison with the original Persian text by Nizami**

SUGAHARA Mutsumi  
(Tokyo University of Foreign Studies)

This paper presents a new edition of the first four chapters (containing 122 distichs) of Quṭb's *Khusraw u Shirin*, a Middle Turkic translation of Nizami's Persian work under the same title, together with the Japanese translation and notes.

In spite of its importance as one of the earliest representatives of fourteenth-century Middle Turkic translations, no detailed comparison of the whole text with its Persian original has been carried out. Intended as an initial step in such an investigation, the text given in this study is based on a thorough collation with the original Persian.

The chapters treated here belong to the introductory part of the work, and have little to do with the story of *Khusraw and Shirin* itself. However, the analysis shows that the Turkic text reproduces the contents of its Persian original rather faithfully.